

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第38回

森の彫刻家 上床利秋

ミケランジェロの遺作 ロンダニーニのピエタは未完成なのか(2)



ロンダニーニのピエタ
(1564年)89歳の作

かつて鹿児島大学彫塑研究室で開催されていた「ミケランジェロ祭」と銘打った忘年会。それを当時の学生たちが恩師中村晋也先生のもとに集まりひさしぶりの開催。その中で標題のテーマを私が発表することになった。



この作品には完璧に仕上げられているキリストの腕がぶら下がるように残されており、またキリストや、聖母マリアの頭部にはそれぞれ制作途中で計画を変更した顔の断片を見つけることができる。恐らくは現存のかたちよりも別のポーズで、作品は、かなりの完成度で出来上がったものと推測される。ではなぜそれをほかのパーツと同様に取り除かなかったのだろうか。そしてまた、ミケランジェロ自身はこの遺作を完成したものだと思っていたのだろうか。

ロンダニーニのピエタとは
元々ローマ、ロンダニーニ宮に放置されていたものを、現在ミラノ、スフォルチエスコ城に移したことから、ロンダニーニのピエタと呼ばれているミケランジェロの遺作のことである。

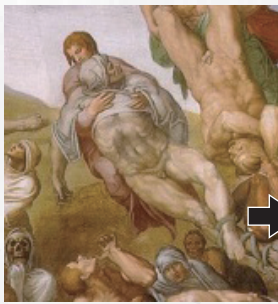
ミケランジェロは生涯ピエタと呼ばれる群像を、4点制作したとされているが、89歳で亡くなる4日前まで彫り進めていたといわれるロンダニーニのピエタは彫刻を勉強するものにとつて、とりわけ注目されるべき作品である。それは天才の制作途中の息遣いさえも感じられそうな代表作である。天才が作品に遺してくれた制作手法や表現の狙いまで、思考の変化が窺い知れる最も重要な作品である。



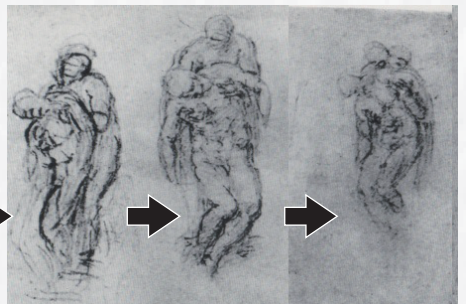
再発見されたキリスト像の頭部および「ロンダニーニのピエタ」の石膏像との合成



再発見されたキリスト像の頭部および「ロンダニーニのピエタ」の石膏像との合成
アウレリオ・アメンドラ写真集より



最後の審判(一部)1541年(66歳)
サンピエトロ大聖堂



ロンザニーニのピエタのためのデッサン1550年(75歳)頃
オックスフォード アッシュモリアン美術館蔵

着想から、最晩年の様子まで
ミケランジェロは現存するロンダニーニのピエタは、壁画「最後の審判」の一部から発展させ、彫刻として彫りこんだという論説が近年になって話題になった。確かにその構成やポーズは似ている。ミケランジェロが最後の審判を描き上げたのは66歳のころだった。その可能性はあるだろう。

最後の審判のキリストは筋肉隆々とした男として描かれている。デッサンにおいて試行錯誤を繰り返して、彫刻では痩せ細らせたキリストとしてピエタ像としていったよつである。実際にピエタとしての構想は75歳でデッサンとして残っており、80歳で原初案の彫刻に着手して現在の細い足のキリストに表現されている。

ではなぜ途中で、いや、ほぼ完成していた作品をコンセプトまで変えてしまったのだろうか。

考えられる背景は、残り少ない寿命を彼が実感していたことである。この最後の彫刻は依頼者がだれなのか分かっていない。

切り落とされた、そして現代になって発見された制作初期のキリストの頭部を写真で復元した資料を見ると、かなりの完成度であることが分かる。サインまで入れてあった初期の仕事を終わりとせず、キリストの顔を段階を経て最終的には自分の顔に変更し、聖母マリアにはねぎらいの表情を彫り込んでいく。ミケランジェロの創作の苦労はマリアの抱擁によって癒される。その二つの魂を、はや写実的表現にする時間もないが、その必要もない。

ミケランジェロの最晩年は常に神様とともに制作し、マリアに抱えられて天国に行きたいという願いのもとで彫り続けていたのであろう。

1564年2月12日、作品に最後の手直しをし、14日、高熱のまま、ベッドに入ること拒み、戸外を散歩。15日、衰弱。18日、弟子や医師たちの見守る中に没。享年89歳。人類最強の壮絶な彫刻家たる生き様だったに違いない。

日展会員 第一幼児教育短期大学 教授



この森のアトリエで彫刻を
共に作ってみませんか

ホームページ刷新しました。

<https://douzou.jp/>

上床利秋

検索

このページのバックナンバーも

読むことができます。